

1. 事業名：横浜市の学童期における歯科保健実態調査

2. 申請者名：一般社団法人横浜市歯科医師会 会長 杉山紀子

3. 実施組織：一般社団法人横浜市歯科医師会・鶴見大学歯学部地域歯科保健学教室

4. 事業の概要：

平成 21 年度・平成 22 年度歯科保健活動事業にて「横浜市における歯科保健ニーズの調査と保健活動の実施」を実施し、大都市特有の歯科保健活動の課題が抽出することができた。

その結果、「第 2 期健康横浜 21」の生活習慣の改善の重点項目として「歯・口腔」が位置づけられ、さらに、平成 24 年度からは、「横浜市妊婦歯科健康診査」が新たな事業として行われることとなった。

平成 29 年度に「健康横浜 21」の中間評価が実施されるにあたり、学童期の歯科保健実態を調査することで、効果的な歯科保健活動を展開する。

5. 事業の内容：

1. 地域診断

横浜市在住の学童期住民を対象に、歯科保健医療に関する要望、知識や保健行動などについて調査し、学童期住民の歯科保健ニーズの変化を分析。

1) 質問紙調査

- ・対象者は学童期の市民
- ・う蝕予防、歯周疾患予防、口腔機能に関する項目
- ・横浜市歯科医師会地域保健活動時に実施

2) 分析

- ・平成 21, 22 年度調査との比較分析

2. 保健活動

地域診断の結果に基づき、学童期の保健活動を検討。

6. 実施後の評価（今後の課題）

平成 21・22 年度（以下、前回と標記）の調査人数よりも今回の方が多いが比較分析を記す。う蝕発生に関して全体的に 29.1%→22.3%と減少したが、発生率は年齢が高くなるほど多い。甘いお菓子の摂取は、毎日食べる数は全体的に 30.2%→24.6%と減少した。甘い飲み物の摂取は、ほぼ毎日飲んでいる数は全体的に 26.7%→21.9%と減少している。刷掃習慣については、本人と保護者の両方で磨いていることが多く、5 歳から一人磨きの増加がみられる点は前回同様であった。フッ化物配合歯磨剤の使用・使用頻度は、前回同様高かった。食習慣に関して、前回同様であった。どの年齢においても 100% 近くが 1 日 3 食食べており、全体の約 15%が柔らかい物を好み、約 75%が家族と一日一食を共にする。かかりつけ歯科医の決定も前回同様年齢が高くなるほど多かった。フッ化物塗布をしている数は前回と比較すると 1 歳でかなり増えた。しかし、フッ素洗口の指導は変わらず、どの年齢でも行われていない。小学 1 年生の結果について記す。う蝕の発生に関して、1 年以内にう蝕が発生した者は、前回同様 40%で、性差はあまりみられなかった。甘食の摂取は、ほぼ毎日または週 3~4 日の者が 80%近くおり、前回同様多い結果であった。甘い飲み物の摂取は、週 1~2 回が最も多く、こちらも前回同様であった。刷掃習慣は、本人と保護者が一番多く、次いで本人のみが多く、前回同様であった。フッ化物配合歯磨剤の使用は、毎日使っている者は 85%以上で性差はなく、前回同様であった。食習慣に関して、100%近くが 1 日 3 食食べており、約 20%が柔らかい物を好むという前回同様の結果であった。かかりつけ歯科医の決定は約 80%と前回同様の結果であった。定期健診受診率とフッ化物塗布は前回よりも増えたが、フッ化物洗口の指導は前回同様ほぼされていない。小学 4 年生、中学生、高校生の結果について記す。う蝕の発生について、高校生が最も多く、小学 4 年生、中学生の順であった。う蝕予防への意識は、小学 4 年生、中学生、高校生となり、年齢が上がるほど予防への意識が下がる傾向がある。甘食の摂取は、どの年齢層においても週 3~4 日が最も多かった。甘い飲み物の摂取は、高校生のほぼ毎日が最も多く、女子より男子が多かった。刷掃習慣について、1 本 1 本丁寧に時間をかけた歯磨きはほぼ毎日が最も多く、高校生では男女共に 60%が行っていた。小学 4 年生の 50%以上が、フッ化物配合歯磨剤を用いているが、中学生及び高校生はフッ化物が入っているかわからない者が多かった。使用頻度は、約 85%が毎日使っており、小学 4 年生が最も多かった。歯磨き時のデンタルフ

ロスなどの使用は、小学4年生が最も多く、約10%だった。食習慣について、ほぼ全ての質問において小学4年生が最も多く、あまり噛まずに飲み込む事のみ高校生が最も多かった。かかりつけ歯科医の決定は、小学4年生は約80%と高いものの、中学生で約半分になり、高校生では約30%となってしまう。

健康横浜21における行動目標の食生活について、3食しっかり食べる小・中学生の割合を100%に近づける目標数値は達成できている。今後、これを維持することへの働きかけと噛まずに飲み込む傾向への対策が必要となる。各年齢層において糖分摂取の減少が、う蝕発生率の減少につながっていることがわかった。今後の課題として、前回同様、各年齢層においてフッ素洗口への指導がほぼされていない。また、かかりつけ歯科医の決定が小学生、中学生、高校生と極端に少なくなっていることへの対策が必要となる。育ち・学びの世代の行動目標達成と対策が、働き・子育て世代の食生活、歯と口腔への影響、稔りの世代の行動目標達成となる。